

神戸女子大学古典芸能研究センター令和6年展示

芸能と遊び

～暮らしの中の楽しみ～

展示図録



中央2枚：能絵合かるた・両側：謡かるたより「高砂」
(古典芸能研究センター蔵)

期 間：令和6年2月5日(月)～3月29日(金) 土・日・祝日休室

時 間：午前10時～午後5時

場 所：神戸女子大学古典芸能研究センター展示室

(神戸市中央区中山手通2丁目23-1 神戸女子大学教育センター2階)

能・狂言や人形浄瑠璃・歌舞伎といった古典芸能は、舞台を鑑賞するだけではなく、日々の暮らしの中でもいろいろなかたちで親しまれてきました。例えば江戸時代、人々は、宴席で謡の一節を謡い興じたり、ひいきの歌舞伎役者の役者絵を買い求めたりしていました。そして、謡をふまえた文芸作品や美術工芸品が次々に作られ、人気役者の姿に由来するファッションが流行し、芝居にちなむ絵本なども数多く出版されています。

今回の展示では、能や歌舞伎の演目に係わる双六・カルタ^{すごろく}といった遊具から、座興の替え謡や役者の見立絵類まで、暮らしのなかの「遊び」に係わる資料を幅広く紹介します。併せて、古典芸能をモチーフにした道具類も出品します。この機会に、古典芸能の身近な魅力をお楽しみください。

〔出品リスト〕

	資 料 名	刊・写	所蔵元／特殊コレクション名
1	男重宝記	刊	志水文庫
2	随一小謡絵抄	刊	伊藤正義文庫
3	昇平小謡万戸声	刊	伊藤正義文庫
4	乱曲扇拍子	刊	志水文庫
5	乱曲颯々颯箱	刊	伊藤正義文庫
6	座興 謡作替文句(上・下)	刊	伊藤正義文庫
7	新編 作替小謡集	刊	伊藤正義文庫
8	謡曲 座興小謡集	刊	伊藤正義文庫
9	ゑらき歌	刊	伊藤正義文庫
10	江崎家旧蔵 一番綴謡本「新たゝのり」	写	江崎家旧蔵資料
11	江崎家旧蔵 一番綴謡本「国尽」	写	江崎家旧蔵資料
12	江崎家旧蔵 一番綴謡本「老楽」	写	江崎家旧蔵資料
13	謡行烈座敷狂言	刊	伊藤正義文庫
14	新能組	写	志水文庫
15	〔嘉永元年日吉蔵版能番付〕(諸流能舞 謡名所競)	刊	伊藤正義文庫
16	謡友会第三回茶会記控	写	野口勘蔵旧蔵資料
17	謡曲類題今様歌合	写	
18	謡曲二百番詩	刊	伊藤正義文庫
19	絵本舞台桜	刊	
20	〔能狂言絵本〕	刊	伊藤正義文庫
21	〔能絵本〕	刊	伊藤正義文庫
22	能楽 全	刊	伊藤正義文庫
23	謡かるた	写	
24	〔能絵合かるた〕	写	
25	新板大芝居鳥羽画姿飛廻双六	刊	志水文庫
26	天幕替宇多端歌都都逸	刊	神戸女子大学図書館(森修文庫)
27	八犬伝狗之草紙	刊	神戸女子大学図書館(森修文庫)
28	花舞台当双六	刊	神戸女子大学図書館(森修文庫)
29	〔仮名手本新狂言 なぞづくし〕	刊	志水文庫
30	福神役者目附絵目安	刊	志水文庫
31	新板役者善悪目附合	刊	志水文庫
32	〔役者目付絵〕	刊	志水文庫
33	姿記評林	刊	志水文庫
34	〔三都劇場役者草の種〕	刊	志水文庫
35	客者評判記	刊	志水文庫
36	諸国産物見立評判記	刊	志水文庫
37	三芝居役者百人一首見立評判記	刊	志水文庫
38	嘉永六丑の顔見世橋尽し見立評判記	刊	志水文庫
39	瑠寛像黄泉発足	刊	志水文庫
40	〔八代目市川団十郎死絵 涅槃図〕	刊	志水文庫
41	〔三世中村芝翫死絵 涅槃図〕	刊	志水文庫
42	東海道五十三次 品川 沢村田之助 滝夜叉	刊	志水文庫
43	東海道五十三次 平塚 時宗 中村芝翫	刊	志水文庫
44	能楽蒔絵膳「道成寺」・「安宅」	一	

※古典芸能研究センター所蔵資料はコレクション名のみ

はじめに

展示のタイトルを目にして「芸能それ自体が遊びなのでは？」とお感じになったかたもいらっしゃるでしょう。その通りで、芸能はそもそも「遊び」とも言えるのですが、さらにそこからさまざまな「遊び」の世界が広がっていきます。例えば現代の私たちも、芸能のパフォーマンス（実演）を鑑賞するだけでなく、写真や動画を観たり作品の台本を読んだり、あるいは関連グッズを入手するなど、さまざまなかたちで芸能を楽しんでいます。江戸時代の人々も同様でした。

本展示では、能・狂言や歌舞伎が、近世の市井の暮らしの中でどんなふうに楽しまれてきたのかをご紹介します。内容構成は、能の「謡」と歌舞伎に関する資料を中心に、

（Ⅰ）「謡」からの展開

（Ⅱ）カルタ・双六・なぞなぞ等の遊戯

（Ⅲ）歌舞伎に係わる絵画資料

の3つのセクションにおおむね分けました。

（Ⅰ）では、能の詞章を謡う「謡」^{うたい}が広く楽しまれていた様子をみます。謡は、江戸時代の成人男子にとってのたしなみとされており、部分謡（小謡）は寺子屋の教科書としても使われていました。もっぱら武士階級に享受されていた「能」とは違って、「謡」は一般の町人層にも親しまれていたのです。「能」は幕府の式楽（＝儀式に用いられる芸能）でもあり堅苦しい印象が強いのに対して、謡は日常生活のさまざまな場面で気軽に謡われ、楽しまれていました。また、謡は一般教養として多くの人々に共有されていたことから、文学の世界にも大きな影響を及ぼしています。今回は、パロディーの替謡（元曲を揶揄する「やつし謡」とも）や新作の謡、謡の文句や能の曲名を用いた戯文など、謡の文化ともいえるべき様相を紹介します。

さらに謡にとどまらず、手軽に手に取れるサイズの能絵、あるいは浄瑠璃や歌舞伎の題材を能狂言仕立てにした資料など、趣の一風変わった資料もご覧ください。

（Ⅱ）では、能や歌舞伎に係るカルタと双六^{すごろく}、さらに「なぞなぞ」や「目付絵」^{めつけえ}といった遊びを紹介します。こうした遊戯には、幅広い層に人気のあった歌舞伎関係のものが多く見られます。双六は「盤双六」と「絵双六」の二つの系統に分かれますが、ここでは、江戸後期から近代に至るまで庶民の安価な娯楽として普及した「絵双六」から、芸能に係わるものを展示しました。

（Ⅲ）では、歌舞伎に係わる絵画や絵入りの資料のうち、ちょっと遊びの入ったものを集めました。役者評判記や舞台の様子を描く芝居絵、役者を描いた役者絵も、何かに「見立て」てひとひねりしているもの、思わず笑みの浮かぶようなものを選んでいきます。歌舞伎に係わる絵というと大判の豪華絢爛な錦絵（多色刷の浮世絵版画）が注目を集めがちですが、もっと身近なかたちの、さまざまな絵をお楽しみください。

(I)「謡」からの展開

謡のひろがり

江戸期に入り整版印刷が普及すると、謡本が盛んに刊行されるようになる（ちなみに、謡本は江戸期のベストセラーであった）。それは、謡を教えて生計を立てる謡の師匠がうまれたことからわかるように、多くの人々が謡を嗜むようになったからである。

謡が広まるにつれて、その効用も注目されるようになった。謡の文句（＝能の詞章）は、有名古典文学作品を典拠とするものが多い。『源氏物語』や『平家物語』を読まなくても、謡を謡うことを通して、その有名なエピソードを知ることができた。また、冠婚葬祭や日常の祝事や法事、あるいは季節行事などの際には能の謡の一節が謡われた。これは能が幕府の式楽であり、幕府の公式行事の際に謡が謡われることに由来するものだろうが、それだけに、人々にとっては、ことあるごとに謡の一節でも謡えるというのが理想的なありようだった。教養として、あるいは社会人、男子の嗜みとして、謡は推奨され、享受されるようになっていった。

こうした謡の広まりのなかで、謡のもつ「種々の得（＝徳）」を数え上げた「謡十徳」や「謡十五徳」が明和・安永期頃から小謡本にも登場する。これは、室町期に成立した「連歌十徳」をふまえたものとされるが、そこから派生した「香十徳」「立花十徳」などと比較しても、謡の「徳」は、より実利的な内容になっていることは興味深い。

1. 男重宝記

刊 半紙本 5巻1冊

江戸初期の教養書。5巻。草田寸木子著。元禄6年（1693）刊行。『女重宝記』に続いて同じ作者により刊行された。題名の通り、こちらは男子の心得ておくべき教訓・教養が記されている。「巻之一」のはじめに「男子一代の総論」として「よみかき学文の芸を第一」とし、以下一般知識から手習、詩、和歌、連歌、俳諧、茶の湯、立花など諸芸にわたって述べ、最後の「巻之五」では「しつけ五十一箇条」をあげる。謡については、巻二ノ一「手習ひ仕やうの事」でとりあげており、五「謡うたひやうの事」（掲出箇所）として、謡を人前で謡うときの心構えなどについて、詳しく解説している。

志水文庫

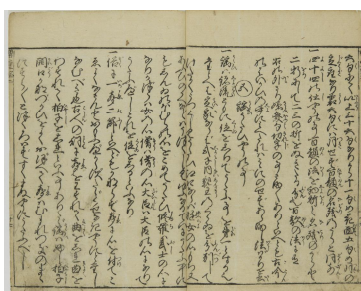
2. 随一小謡絵抄

半紙本1冊 田仲宣編・多賀如圭画 天保10年（1839）

勝村治右衛門・須原茂兵衛・本莊輔二・萬玉堂治助・瀬戸才助・田中太右衛門刊

文化2年（1805）刊本の同名本の覆刻本で、内容も目録など一部の改変を除き同一。頭書絵入りの小謡本としては最も著名なもので、春・夏・秋・冬・追福手向・雑慶賀祝言・段物小歌語口説・遠くて近き小謡・祝言の各部で計219曲所収。前付として口絵とかなり詳細な謡口伝など14丁があり、頭書にも絵図が多い。頭書は、能に係わる知識のほかに、本朝歴代能書・和漢児世説・百官名・東百官・四季十二月異名・当流騷方大意・和制文字などを載せる。

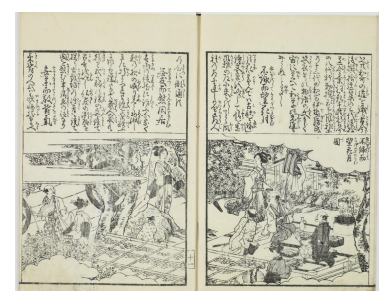
伊藤正義文庫



1 『男重宝記』巻二



2 『随一小謡絵抄』



3 『昇平小謡万戸声』

3. 昇平小謡万戸声

半紙本1冊 速水春暁斎画 文政6年(1823) 山本長兵衛刊

本書は、同年に同書肆が刊行した『観世小謡万声楽』を使用した同版の異名抜刷本。本書の構成は、元本の前付の「謡曲十五徳并注解」と、本文後半部「雑祝言」とを併せて1冊にしている。収録曲は全114曲(祝言・四季・賀・家督・元服・花月・酒宴・祝言・段物)と、頭書に「小哥曲論義物語ノ部」12曲を掲載。「謡十五徳」は、この部分を独立させて「絵本謡十五徳」の名で発行している。十五徳の説明のみならず大判の挿絵が入るのが特徴。

伊藤正義文庫

「見立」と「やつし」

～近世文化における遊びをめぐって～

日本の文学・美術・芸能などには「見立」と「やつし」という表現方法があります。日本文化にとっては重要な発想方法であり、特に近世の文化にはこの発想が随所に潜んでいるとされています。

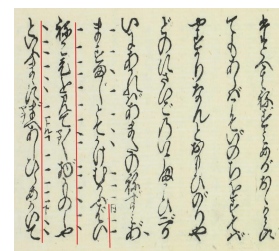
「見立」「やつし」を一言で定義することは難しいのですが、あえて言えば、「見立」はあるものを別のものになぞらえること、「やつし」は昔の権威あるものを現代風に卑近にして表すことと言えます。わかりやすい例をあげれば、落語家が扇子をくわえてキセルににするのが「見立」、平安朝の小野小町が江戸の娘になって登場するのが「やつし」です。「見立」や「やつし」の重要なポイントは、なぞらえられるものが、作り手と受け手の間で共有されているのが前提であることです。近世の日本においては、それを意識せずとも支障のないほどに、共有の「知」が積み重ねられていました。

江戸のさまざまな遊びもまた、「見立」と「やつし」に満ちています。何がどのようになぞらえられているのか、そしてそれはなぜか。当時の人々にとってはどこが面白かったのか。その解説は、現在の私たちにとってはわかりにくい部分もあると思いますが、近世人のまなざしで謎解きをお楽しみください。

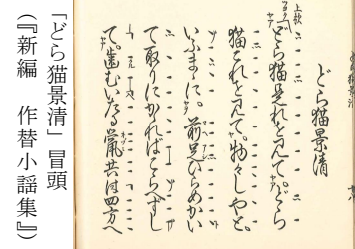
謡って遊ぶ ～替謡あれこれ～

パロディは、原典を知り尽くしてこそ楽しめる。謡の流行に伴って、謡をもじった替謡が多く作られるようになった。これらは「戯れ謡」「やつし謡」「酒宴謡」「肴謡」などとも呼ばれ、酒宴の場などで楽しまれた。替謡は、聞かされる側も理解できないと場は盛り上がりがないから、当然、座の一同も元謡を知っているということが前提となる。人々がいかに謡に親しんでいたかということがわかるだろう。

ここでは、刊行された替謡の本を紹介する。替謡は親しみやすさが魅力的なのか、近代に入っても刊行は続き、昭和初期頃までは各種出版されている。(多くは、携帯しやすい小型本である。) 謡が教養の一つとされていた時代の名残ともいえようか。



「単景清」途中から
『乱曲扇拍子』



『どら猫景清』冒頭
『新編 作替小謡集』

昭和3年刊『新編 作替小謡集』は、先行書の『乱曲扇拍子』(あるいは『座興 謡作替文句』)の替謡も一部再掲する。

上掲の「どら猫景清」は、「^{ねずみ}単景清」の後半部分を「はいねこ(灰猫)」を「どら猫」と変えて収録(展示4～7参照)。

4. 乱曲扇拍子

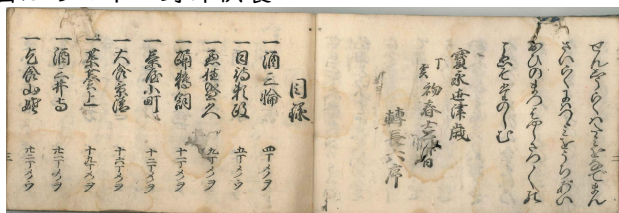
横本1冊 転長六(序) 宝永4年(1707)岡田傳兵衛刊

掲出本には「宝永世津歳丁亥初春吉祥日 轉長六序」、刊記は「宝永四年亥弥生吉日／今出川通大宮東へ入丁／岡田傳兵衛板」とあるが、ほかのセンター蔵本（伊藤正義文庫本2冊・志水文庫本1冊）は序は「初春吉祥日 轉長六序」、刊記は「弥生吉日」のみ。本書は他所で高橋権兵衛刊本（住所・刊者名部分のみが異なる）が確認されているが、前後関係は未詳。

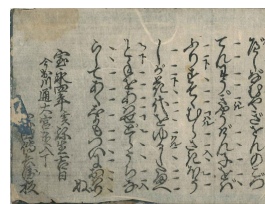
内容は曲舞謡などの謡^{くせまいうたい}所の替謡^{うたいどころ}。序によると、酒席で酔客の歓心を買うべく「酒屋の藤次郎たるつな」（本書「酒頼政」）と名乗って替謡を謡ったところ、人気を博したので、酒宴の座興用に世上の36番の乱曲謡になぞらえ、18番の戯作謡を作ったという。作者の転長六は、鷺流の狂言役者（鷺仁右衛門門下、素人弟子か）。

〔所収曲〕全18曲：酒三輪・日待頼政・悪性盛久・踊鶉飼・茶屋小町・大食景清・葉葵上・酒三井寺
・乞食山姥・大尽安宅・胤景清・貞見世百万・酒よりまさ・相撲花月・薑（はじかみ）自然居士・簗（かご）
鉢木・酒はちの木・野郎供養

志水文庫



4 『乱曲扇拍子』序末・目録



4 『乱曲扇拍子』刊記

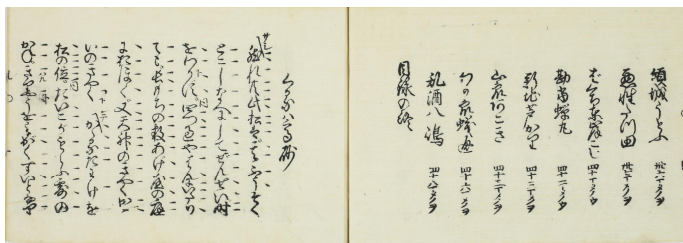
5. 乱曲颯々颯箱

横本 1 冊 山本斧麻呂（序） 刊年刊者不明

展示4と同趣の替謡集。序に、山本斧麻呂が「近曾都の転氏乱曲扇拍子といふ事なん桜にちりはめ出されり跡を追」うとあり、宝永四年刊『乱曲扇拍子』を意識して刊行する旨をいう。また「颯々颯箱／の一曲何人の作といふ事は／しらねとも…」ともあるので、山本は原作者でなく編者であろう。展示品は幕末以降の復刻らしいが、初版は宝永7年5月の鴈金家庄兵衛刊本。所収曲は25曲。大坂で出版されたせいか、大坂を舞台とした謡が多い。

〔所収曲〕 全25曲（※括弧内は内題）：

くるは高砂・大食やしま・ねこ田むら（猫屋田
むら）・餅長良・大酒忠則・くるハ放下僧・盗
人鉄輪・将棋三井寺・くらや花月・てんかく女
郎花・うば浮ふね（乳母うき舟）・色里融・酒
もり海人・豆腐藤戸・たいこ実盛（くるわさね
城うとふ・悪性たつ田・ばくち東岸こじ（かる
か衆蟻通・乱酒ハ嶋（酒ゑんハ嶋）



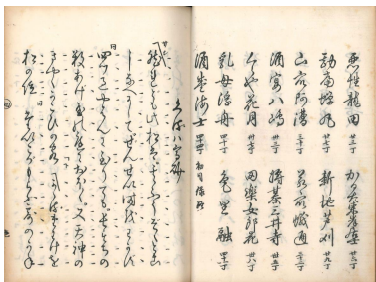
5 『乱曲颯々颯箱』目録末／卷頭

もり海人・豆腐藤戸・たいこ実盛（くるわさねもり）・そうか通小町・灸白楽天（やいと白楽天）・傾城うとふ・悪性たつ田・ばくち東岸こじ（かるた東岸居士）・勘当蟬丸・新地芦かり・山衆阿こき・わか衆蟻通・乱酒八嶋（酒ゑん八嶋）

伊藤正義文庫

6. 座興 謠作替文句

半紙本2冊(上・下) 浅野弥助 明治35年(1902) 檜常之助刊



6『座興 謡作替文句』上卷

上巻は『乱曲颯々諷箱』（展示5）、下巻は『乱曲扇拍子』（展示4）によって、改め書名を変えて出版された、明治の新刻本。両巻の収録曲も両書と基本的には同じだが、一部、文言が変更されている。例えば遊郭の情景描写の表現を別の語に変えたり、漢字仮名表記も含め、細かい異同が見られる。

▽上巻所収曲（※『乱曲颯々颯箱』順不同）全25曲

（郭高砂・大食八島・猫屋田村・餅張良・大酒忠度・くるわ放下僧・盗人鉄輪・豆腐藤戸・くるわ実盛・そうか通小町・やいと白楽天・傾城善知鳥・悪性龍田・かるた東岸居士・勘当蟬丸・新地芦刈・山衆阿漕・若衆蟻通・酒宴八島・将棋三井寺・くらや花月・田楽女郎花・乳母浮舟・色里融・酒盛海士）

▽下巻所収曲（※『乱曲扇拍子』）全18曲

（酒三輪・日待頼政・悪性盛久・踊鶴飼・茶屋小町・大食景清・薬葵上・酒三井寺・乞食山姥・大尽安宅・鼠景清・顔見世百万・酒頼政・相撲花月・葱自然居士・箆鉢木・酒鉢木・野良供養）

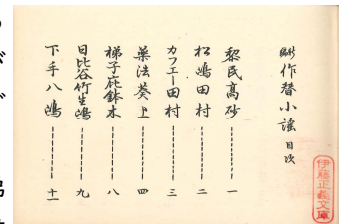
伊藤正義文庫

7. 新編 作替小謡集

横小本1冊 昭和3年(1928)再版 檜常之助刊

同じ刊者刊の『座興 謡作替文句』の一部を短縮または改変して利用するものと、新作替謡とを所収。新作には「カフェ」など時代を反映した語が散見される。既刊本所収曲の改変利用は、例えば先行本の「嵐景清」は「どら猫景清」と曲名も変更、後半のみを収録。

〔所収曲〕全15曲：黎民高砂・松島田村・カフェー田村・薬法葵上・梯子底鉢木・日比谷竹生島・下手八島・能評花月・酒吞鉢木・どら猫景清・世阿弥殺生石・放将龍田・女優八島・官僚忠度・豆腐藤戸

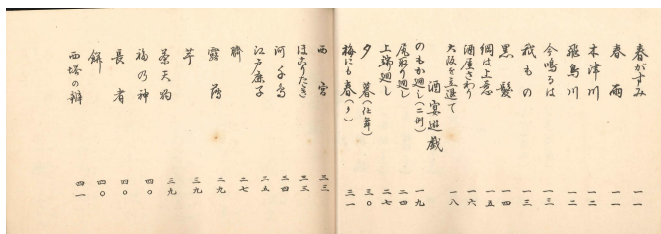


7『新編 作替小謡』目次

伊藤正義文庫

8. 謡曲 座興小謡集

横本1冊 観世流謡曲研究会編 昭和30年(1955) 大阪うたひ本店刊



8『謡曲 座興小謡集』目次

「謡曲」「小謡集」と銘打つが、内容は端唄や都々逸など各種のうたいものを含む。「西宮」以下12曲は『ゑらき歌』(展示9)を収録。酒席での余興を紹介するなど、文字通り「座興」のための書。

〔所収曲〕五目謡（一～四、※替謡）／いろは・一二三／不具謡（二種、※替謡）／都々逸・

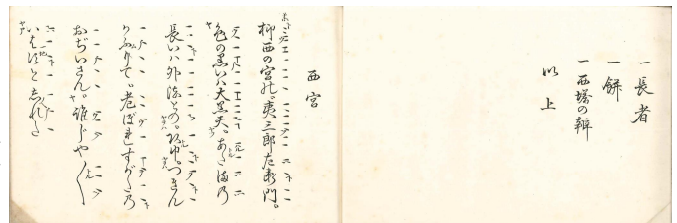
鶴の声・虫の音・我が恋・春がすみ・春雨・木津川・飛鳥川・今鳴るは・我もの・黒髪・綱は上意・酒屋さわり・大阪を立退て／「酒宴遊戯」…のもか廻し・尻取り廻し・上端廻し・夕暮・梅にも春・／西宮・ほこりたゝき・河千鳥・江戸鹿子・臍（へそ）・露雁・芋・茶天狗・福の神・長者・餅・西塔の弁

伊藤正義文庫

9. ゑらき歌

横本1冊 大正5年(1916) 吉田善之助刊

新作の小謡集。所収曲は「西宮・ほこりたゝき・河千鳥・江戸鹿子・臍・露薄・芋・茶天狗・福の神・長者・餅・西塔の弁」の全12曲。掲出本は大正5年版だが、大正11年刊本も所蔵。大正元年刊本（観世文庫蔵）、昭和2年版（再刊だが異版、法政大学鴻山文庫蔵）も確認されており、人気があった様子がうかがえる。



9『ゑらき歌』

（※「ゑらき」は楽しみ笑う意の動詞「ゑらぐ」の派生語。）

伊藤正義文庫

江崎家旧蔵資料から

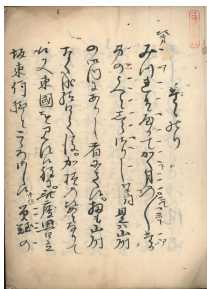
古典芸能研究センターには、姫路で江戸中期から続く能楽のワキ方の江崎家に受け継がれてきた蔵書類が「江崎家旧蔵資料」として収められている。

江崎家の蔵書については、昭和初期から、当時の当主・九世直康と交流のあった能楽研究家の横山^{そまびと}山人によって、能楽雑誌類にしばしば紹介されていた。その後、田中^{まこと}允によって、昭和27年（1952）刊行開始の『未刊謡曲集』に数多くの曲が翻刻・紹介され、「江崎本」として学界に広く知られるようになった。同書の伝本解題は「江崎本」について「姫路の福王流脇方江崎家蔵本。零本群であるが、江戸中期のものが大部分で、いずれも福王流。」としている。

『未刊謡曲集』に紹介・翻刻された作品は複数の伝本が現存する番外曲（＝能として演じられている「現行曲」以外で、謡本として台本だけが現存する作品）が大半だが、江崎本には他に見られない独自曲も多い。既存の番外曲を短く改変した異本バージョンや決まり事を覚えるために作られたと思しき使用謡、あるいは謡愛好家による戯作替謡など、さまざまな謡本類が含まれているからである。こうした独自曲群の資料はまた、大げさな物言いをするなら、江戸中期から現代に至るまでの謡享受の変遷を語るものでもある。その中から、今回は替謡と新作の戯謡の資料を紹介しよう。

10. 江崎家旧蔵一番綴謡本「新たゝのり」

写 半紙本 仮綴 1冊



11『新たゝのり』

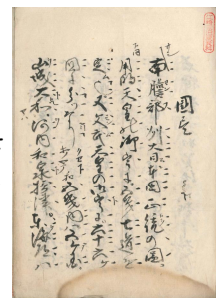
本曲は観世流現行曲《忠度》のパロディで、完曲の替謡。《忠度》にできるだけ忠実にしようとしているが、そのためにかえって文意が通らない部分がある。江崎家旧蔵本が孤本だろう。内容は、「忠度」とは無関係で、天明4年（1784）3月24日、佐野善左衛門政言（1757～1784）が、老中田沼意次の息子意知に江戸城内で刃傷に及んだ事件を題材としている。この事件で切腹させられた佐野は「世直し大明神」と世人にあがめられたという。作者のスタンスもまた然り。奥書には「タツ三月下旬」とあるが、曲の製作年月ではなかろう。「作者不知」、本文中に田沼父子の名が見えないなど、興味深い点がある。『未刊謡曲集 続六』に翻刻あり。

江崎家旧蔵資料

11. 江崎家旧蔵一番綴謡本「国尽」

写 半紙本 仮綴 1冊

本書の内容は、畿内から順に日本の国名をあげていく謡いもので、一種の使用謡。本文末の奥書（同筆）には「盲人蛇之居処をしらす病中の／慰に節付申候宜加筆被下候／明和五子正月 内海清左衛門作」とあり、病中の徒然を慰めるべく作曲をしたという事情がわかる。節付の加筆修正を依頼していることから、筆者は江崎家の門人で、当時の江崎家当主（三世直信、あるいは四世直義）に宛てられたものか。

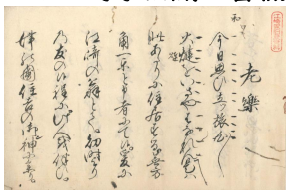


江崎家旧蔵資料

11『国尽』

12. 江崎家旧蔵一番綴謡本「老楽」

写 横本 1冊



12『老楽』

本曲も、江崎本のみで確認されている。近世後期頃の福王流の節付がされた仮綴じ本。巻末には「此一曲丸世無法之太夫寝言ヲ以作之者也」とあり、九世ならぬ「丸世」の無法太夫が寝言で作った戯謡という。さらに、「笑はれて我も笑ふて寅まへて（＝捕らまへて）たれもしからず我もとがめず」という戯歌を記す。はじめのワキの名ノリに「江崎の翁とて幼時より友の候程に」とあり、ツレはこの江崎の翁。二人揃って百寿の祈願に住吉大社へ詣でるという内容。ワキの次第は《高砂》のワキ次第、後半には待謡のパロディーもある。曲名の読み方は「おいらく」か、未詳。

江崎家旧蔵資料

～遊戯と読みもの～

能の謡に始まり、替謡を謡って遊ぶほか、人々はさらに「謡」をもとにして遊んだ。カルタや双六に始まり、謡の文句を使って戯文を書いたり、謡にちなむ詩文を作ったり…と、枚挙にいとまがない。

一方、曲の内容はさておいて、曲名で遊んだ作品にも事欠かない。定番の百曲（内百番）の曲名を「采女」のクセにはめ込んだ替謡（「百番題」、正徳5年刊『瓢箪盃』所収）や、曲名を織り込んで書翰の体裁に仕立てた「謡番組文章」（『頭書絵抄 福寿小謡円万楽』の頭書、右図参照）、そして謡の曲名を織り込んだ行列献立次第を載せる『謡行烈座敷狂言』（展示13）などである。そのほか、江戸期に流行した各種の番付類の一つとして、謡の番付も作られている（展示15）。

13. 謡行烈座敷狂言

横小本 1冊

浪花散人伝重堂琴滝序 寛保3年（1743）安井弥兵衛刊



13『謡行烈座敷狂言』

謡曲曲名尽くしの戯作。御幸の行列と座敷飾り・献立の次第になぞらえたもの。全体は不奉公者の狂言仕立てになっており、主人公の名代として南都春日社を参詣した太郎冠者が、南都で耳にした「謡行列」を主人に読んできかせて機嫌をとるというストーリー。

琴瀧の序・狂言台詞・目録に続いて、「天鼓元年水無瀬月／皇帝為源氏供養／大原御幸二付往来／通小町停止之事」以下、曲名を織り込んだ行列献立次第である。この部分のみを「謡之行列」「謡名御幸記」などの名で書写した写本も多く残っている。

伊藤正義文庫

〔参考〕 「謡名御幸記」（弘化4年写）

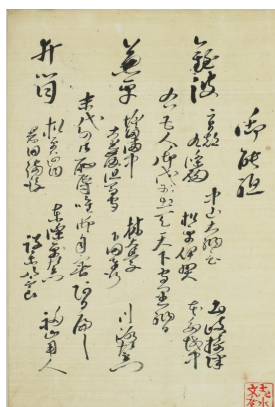
上記のように、行列献立次第の部分だけを書写した資料。『謡行烈座敷狂言』の内容とほぼ同様だが、使用曲名など詳細部分はかなり異同が見られる。奥付は以下の通り。

「宝暦七丁丑年初夏二とある書を／弘化四年丁未霜月下旬写ス／衣川姓」

伊藤正義文庫

14. 新能組

写 半紙本 1冊



14『新能組』冒頭

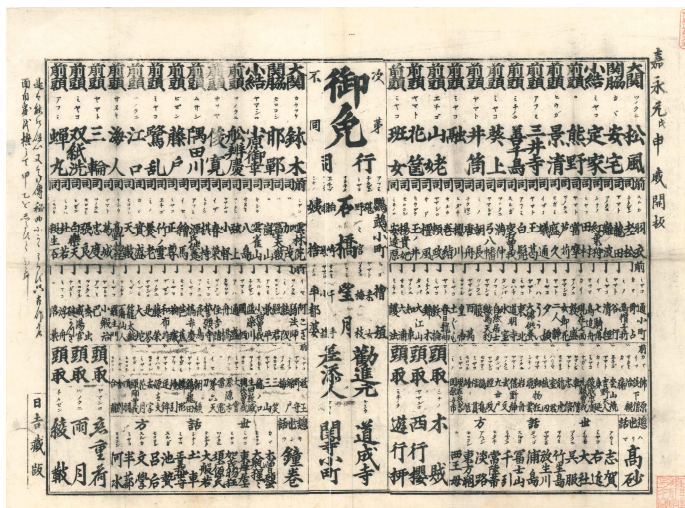
本書の前半は「御能組」（「狂言」含む）、「世の中不卦入」、狂歌もどきの歌三首と戯書尽くし。当時の公卿や大名を揶揄した、能番組擬きの作品を含む資料である。後半はやや性格が異なり、後半4丁表以下の「町触写」は、安政5年（1857）7月4日の魯西亜使節参府に係わる触の写し（「午七月」付の町触と、7月3日付の町年寄役所からの通達写し）。

これらの作品の登場人物はいずれも幕末の公家や大名・旗本であり、一種の「風説留」と言えなくもない。嘉永7年（安政元年）の初頭、ペリーの再来日に端を発した諸外国からの通商要求は、同年3月の日米和親条約締結を機に、ロシア、イギリス、フランスと続き、その対策に幕府は翻弄される。とりあげられた事件は安政4年の下田条約から翌年6月の勅許を得ぬままの日米修好通

商条約調印、そして8月下旬にはロシア・オランダ・イギリス・フランスとの通商条約締結（いわゆる五カ国条約）などで、同年7月から始まったとされる安政の大獄が落としどころということになる。本資料後半の町触は安政5年7月のもので、前半部分もほぼ同時期の作と考えられる。

志水文庫

15. 〔嘉永元年日吉蔵版能番付〕



一枚摺 嘉永元年（1848）日吉刊
謡の曲名の見立て番付。大関が「松風」「鉢木」、勧進元「道成寺」、差添人「関寺小町」、総世話が「高砂」「鐘巻」など、総計全236曲の曲名を、国名を併記して五段構成であげる。番外曲も多い。枠外左上には「是は能の位い又は口伝秘曲にかゝわらず只古作の／面白きを撰みて甲乙をしるすとなむ」とあるものの、上位にはやはり「習」（特別な伝授が必要な曲）で重い（＝重要な）曲が並ぶ。

刊者の日吉は、明治38年刊『謡曲番組一覧表』の編者日吉田吉（元前橋藩お抱えの宝生流シテ方）の可能性が指摘されている。

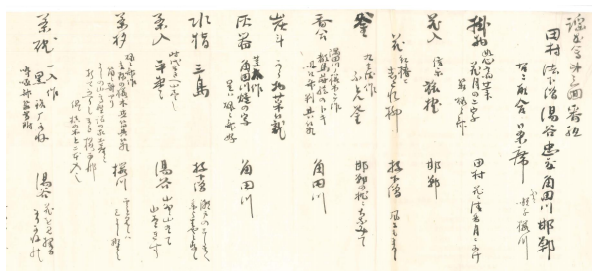
伊藤正義文庫

16. 〔謡友会第三回茶会記控〕

一枚物 写

謡の会に伴う茶席の茶会記の草稿。当日の番組は「田村・放下僧・湯谷・忠度・角田川・邯鄲、囃子／桜川」で、これらの演目の文句に係わるような道具立てを記す。日付・会場も記載されていないので、茶会記を書くための草稿的な控えか。（本紙下方に記された曲名と謡の文句などが解説にあたる。）謡の文句と関連づけた道具立てというのは謡会らしい趣向。

「謡友会」は、近代の富裕層による謡の素人会と思われるが未詳。本資料は、小鼓方大倉流の野口勘蔵の旧蔵資料に含まれる一点で、他に同会に係わる資料は見出せない。今回は、能に係わる趣向の一つで遊びの要素を含むものとして紹介した。

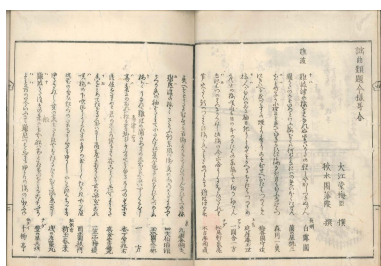


16 〔謡友会第三回茶会記控〕

野口勘蔵旧蔵資料

17. 謡曲類題今様歌合

半紙本 1冊 大江堂梅臣・秋水園落霞撰
岳亭丘山画 江戸後期刊



17『謡曲類題今様歌合』

鴻山文庫旧蔵。文庫主江島伊兵衛の書誌メモに、撰者二人の他著などから、本書も天保年間頃に大坂で刊行されたが、私刊本ゆえ刊記は記されなかったのではないかとする。また、画者の岳亭丘山（がくていきゅうざん）は、北斎門下だが、実は江戸の戯作者丸屋斧吉であり、『狂歌奇人伝』や『百家琦行伝』の著者であると追記する。内容は、謡曲の内容によせた狂歌を作者名つきで掲載するもの。対象曲は難波・田村・西行櫻・西王母・杜若・邯鄲・鶉飼・芭蕉・砧・張良。本書は11丁裏「張良」途中までで、以後を欠く。（神戸女子大学古典芸能研究センター蔵）

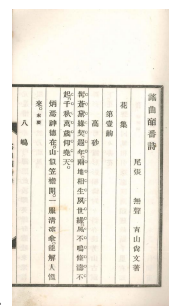
18. 謡曲百詠番詩（前篇・後篇）

縦長本 2冊（前篇・後篇）

明治44年（1911）・大正4年（1915）青山銭四郎刊

観世流の謡曲に因んだ漢詩集。前集「花・鳥」、後集「風・月」の各五十首を載せる。

著者の青山銭四郎（1864～？）は、名古屋の弁護士で市議会議員・県議会議員も長くつとめた人物。旧名古屋藩士の父青山重成は漢学者。初め二松学舎で漢籍を学ぶが、後に法律系に転じた。能は、木下敬賢門下のシテ方として明治16年から出演、大正期まで



18『謡曲百詠番詩』

多数の番組に「青山鉞次郎」として名が見える。跋を書いた水谷弓夫（奥嶺、1848～？）は、美濃出身の漢詩人。教育者としても地元の教育に尽力した。著書に漢詩集『北海紀行』がある。

伊藤正義文庫

19. 絵本舞台桜

刊 半紙本 1冊

浄瑠璃や歌舞伎の題材を能狂言風に仕立てたもので、「菅原・道風（狂言）・国性爺・黒舟（狂言）無間鐘・和田（狂言）」の全6曲を所収。各曲とも見開きの下3分の2ほどに仮想の上演図（舞台は能舞台風）が描かれ、絵の上方に、曲名、登場人物・配役と詞章の一部を載せる。本文（梓付き）は表紙見返しから裏表紙見返までで、狂言は梓外に「狂言」と記す。刊記・書誌は不明ながら、同趣向の『絵本松の花』の一部を別外題で刊行したものらしい。能と浄瑠璃・歌舞伎をない交ぜにして楽しむようなこの種の本はそれなりの需要もあったのだろう。同書から作られたと覚しき本が、他所でも確認されている（法政大学能楽研究所鴻山文庫蔵『絵本雪なづな』）。



19『絵本舞台桜』より「菅原」

『絵本松の花』は二冊本と三冊本が現存（※詳細別掲）、本書は三冊本の一冊目3丁以降を使用している。同書の構成は、1丁表「序」、見開きの口絵2図（「勧進能木戸のけしき」・「あやつりしばるさんばそうの所」）に続き「菅原・道風（狂言）・国性爺・黒舟（狂言）無間鐘」の5曲が続く。本資料は丁付も同じ（表紙見返しの丁付が「三丁」）で体裁を同じくするが、最後に、『絵本松の花』諸本には含まれない独自の作品「和田（狂言）」を収めている。

※各曲の内容検討は、川端咲子氏「資料紹介『絵本舞台桜』解題・翻刻・影印」（『古典芸能研究センター紀要』14号）に詳しい。（古典芸能研究センター蔵）

『絵本松の花』について

二冊本と三冊本が現存し、内容（曲の組合せ）は下記の計四種類に分類できる。

○東京都立中央図書館加賀文庫蔵 三冊本

1) …A 「序」（1オ）、口絵：「勧進能木戸のけしき」・「あやつりしばるさんばそうの所」

所収曲：菅原・道風（狂言）・国性爺・黒舟（狂言）・無間鐘

2) …B 口絵：上手御簾内の太夫と三味線の図（1オ）・「操楽屋之図」

所収曲：和藤内・五雁金（狂言）・三略巻・磯馴松（狂言）・盛衰記・夏祭（狂言）

3) …C 口絵：「浪華歌舞伎顔みせ夜のけしき」（1オ）、

所収曲：二人奴・物くさ（狂言）・敵打・山崎（狂言）・玉豊・曾根崎・鳴神

この三冊分の内容（A・B・C）に加え、二冊本には別の内容が見られる。

○国文学研究資料館蔵 二冊本

上巻…D 口絵：触れ太鼓の図、「能楽屋之図」

所収曲：讃岐伝記・風俗太平記（狂言）・真鳥・楠昔噺（狂言）・千本桜・刀銘月

下巻…上記Bと同じ

○大阪府立大学情報センター蔵 二冊本（2種、うち1種は未見）

内容は、CとDと同じ。

そのほか、『絵本舞台桜』（展示19）と同じく『絵本松の花』を別題で刊行したらしい本『絵本雪なづな』（法政大学能楽研究所鴻山文庫蔵）もある。こちらはBの内容から口絵と冒頭1曲を除いた全5曲である。また、三冊本のみにもみられる「序」では題名を「もちすりくさ緋摺草」とする。（加賀文庫には「緋摺草」の写本を所蔵するが、未確認。）

20. 〔能狂言絵本〕

刊 半紙本 1冊



20 〔能狂言絵本〕より「真鳥」

本書も、浄瑠璃や歌舞伎の題材を能・狂言風に仕立てたもので、展示19『絵本舞台桜』と同じく、『絵本松の花』の一部と考えられる。内容は、口絵の触れ太鼓の図、「能楽屋之図」に続き、「讃岐伝記・風俗太平記（狂言）・真鳥・楠昔噺（狂言）・千本桜・刀銘月」の全6曲所収。体裁は『絵本舞台桜』と同様。

別掲の『絵本松の花』の伝本のなかでは、二冊本の一冊（D）に相当する。本書は装丁も原表紙ではないため、詳細はわからないが、『絵本松の花』二冊本系等の一部であろう。

伊藤正義文庫

21. 〔能絵本〕

刊 半紙本 1冊

右上に能の曲名を載せ、謡の一節とともにその曲を当世風にやつした絵を載せる。雲模様仕切られた上方には川柳を添える。挿絵の人物の台詞も添えた、歌舞伎の狂言絵尽し（歌舞伎のあらすじと絵を載せた小冊子）風の体裁の絵本。所収曲は「高砂・竹生島・西行桜・邯鄲・敦盛・玉井・三輪・遊行柳・難波・松風・梅枝」の全11曲。

前掲の「絵本舞台桜」（展示19）と〔能狂言絵本〕（展示20）が浄瑠璃や歌舞伎の題材を能仕立てにしているのに対して、本書は逆に能の素材を歌舞伎風に仕立てている。

伊藤正義文庫



21 〔能絵本〕より「松風／梅枝」

22. 能 絵 全

刊 折本仕立 1冊

発行者 秦和三／木版印刷者 佐藤保次郎／発行所 博伝社

小さな木版の能絵（6.8cm×4.3cm）全90枚を、切込み入りの紙面に差し込んだいわばアルバム帖。1折片面に4枚ずつおさまるので、両面では240枚収納可能。絵札が入った状態で売られていたものではなく、アルバムだけが別売りで個別の絵札を集めていくタイプのものか。所収曲は「高砂」（シテ・ツレ）、「愛宕空也」（シテ・ワキ）、「紅葉狩」（ワキ・シテ）などのように2枚ずつあるのが本来だろうが、1枚のものが多く、「安宅」のみが3枚（シテ・ワキ・子方）なのは、この3人を主役級の役者が演じる歌舞伎の「勧進帳」の影響と考えることもできようか。

伊藤正義文庫



22 『能絵 全』（見返し・初折表）



22 『能絵 全』（6折裏・7折表）

(Ⅱ) カルタ・双六・なぞなぞ等の遊戯

能楽カルタについて

日本におけるカルタの歴史は、16世紀後半の天正年間（1573～1592）に、南蛮貿易により来航したポルトガル船から伝来したのが始まりと考えられている。文禄年間（1592～1596）には、朝鮮出兵のため肥前名護屋（佐賀県唐津市）の陣営に滞在した人々の間でカルタが人気となり、朝鮮の役に従軍した武士の帰京に伴い、慶長年間（1596～1615）後半には、京都・大坂でカルタが流行した。カルタ人気の高まりから、安土桃山時代には九州の三池（福岡県大牟田市）で国産カルタの制作が開始され、江戸時代初期には、日本独自のカルタも作られるようになった。この時期、平安時代から続く貝覆（かいおお）いの伝統を引き継ぎ、同じ内容の絵札を合わせ取る「絵合せカルタ」が考案され、船、武具、旗印、動物、植物など、さまざまな主題のカルタが制作された。そうした絵合せカルタの盛行の中で、能楽を題材としたカルタも作られるようになったとみられる。

最も古い能楽カルタの記録は、山口吉郎兵衛著『うんすんかるた』（昭和36年、私家版）に記載された、寛永年間（1624～1644）成立と推測される「能狂言絵カルタ」断片12枚の記録である（ただし現物未詳）。また、江戸前期に制作されたとみられる能楽カルタに、狂言50曲を描いた2枚1組、計100枚の「狂言絵合せかるた」（大牟田市立三池カルタ・歴史博物館蔵）が伝存する。寸法は縦7.9cm × 横5.4cmで、狂言の演者2～3名が2枚に分ち描きされ、漢字札と仮名札が対となっているもので、同じ曲を描いた漢字札と仮名札の絵札どうしを探し取る遊び方をしたらしい。

その後、能楽カルタはさらに発展し、謡の詞章の一部が書かれた字札と、能にちなむ絵が描かれた絵札を組み合わせたもの、字札のみのカルタで、能の詞章の一部、説明文、曲名が書かれた札を探し当てるもの、字札のみのカルタで曲名のみを札に大書したもの、花札を真似て獲得した点数を競うものなど、さまざまなタイプのカルタが制作されていく。こうした能楽カルタは、単に能楽愛好者の遊戯を目的に使用されたのではなく、遊びながら能楽の知識や技術を習得する教育的な効果も期待し活用されていたのではないかと考えられる。

〈参考文献〉※敬称略

江崎崇・横山恵一『図説カルタの世界』（平成14年大牟田市立三池カルタ記念館）

江崎崇『ものと人間の文化史173 かるた』（2015年法政大学出版社）

大谷節子「当流絵入 謡玉手箱 謡外題揃之巻」（『観世』75巻9号、2008年9月）

藤岡道子「新出「狂言絵合せかるた」絵札を読む」（『藝能史研究』No.216、2017年1月、例会発表要旨）

増川宏一『ものと人間の文化史94 合せもの』（2000年法政大学出版社）

日本カルタ文化館「江戸期かるた文化の研究」

<https://japanplayingcardmuseum.com/0-0-0-0-carta-culturalhistory-edoera/>

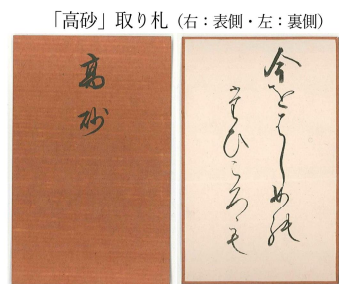
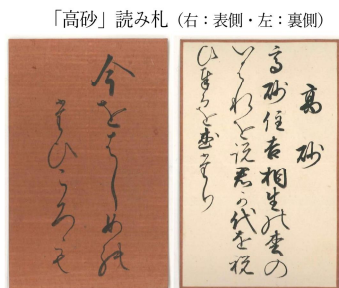
23. 謡かるた

紙札 400枚 明治期写

カルタの札は、すべて同じ体裁で、1枚あたりの寸法は縦9.2cm、横6.0cm。内組、外組に各100曲が分類され、1曲につき読み札1枚、取り札1枚の計2枚がつく。読み札の表側には曲名と曲の内容の簡単な説明、裏側には曲の冒頭の詞章を短く墨書する。対となる取り札には、表側に読み札の裏側と同じ詞章、札の裏側には曲名を墨書する。

基本となる遊び方は、読み手が読み札に書かれた曲名と簡単な説明を読み上げ、取り手が該当する曲の詞章が書かれた札を探し取るという方法であろう。取り手のレベルによっては、探し当てた札の

詞章を謡うこともあったのかもしれない。その他にも、読み札の裏側の詞章を謡い上げ、取り手が該当する曲名の札を探し当てたり、読み札と取り札を入れ替えて、読み手が取り札の表側の詞章を謡い、取り手に対応する曲名と説明書きがある札を探し取るなど、いく通りかの遊び方が想定できよう。遊び手の能や謡に対する習熟度に合わせて、いろいろな組み合わせや方法で楽しむことができる能楽カルタと言える。



23 謡かるた

所収曲：藍染川・葵上・阿漕・蘆刈・安宅・安達原・敦盛・海士・嵐山・蟻通・淡路・碓波・生田敦盛・一角仙人・井筒・岩船・鶺鴒・浮舟・雨月・右近・歌占・善知鳥・采女・梅枝・雲林院・江口・江島・箆・烏帽子折・繪馬・老松・鸚鵡小町・大江山・大社・小塩・姨捨・大原御幸・女郎花・杜若・景清・花月・柏崎・春日竜神・合浦・葛城・鐵輪・兼平・加茂・通小町・邯鄲・感陽宮・砧・清経・金札・九世戸・國栖・熊坂・鞍馬天狗・車僧・呉服・現在七面・源氏供養・絃上・恋重荷・項羽・皇帝・小鍛冶・小督・小袖曾我・胡蝶・西行桜・鷺・逆鉾・桜川・實盛・三笑・志賀・七騎落・自然居士・石橋・舍利・俊寛・俊成忠度・春榮・鍾馗・照君・正尊・猩々・白髭・代主・須磨源氏・隅田川・住吉詣・西王母・誓願寺・善

界・関寺小町・殺生石・摂待・蟬丸・禪師曾我・千手・草紙洗小町・卒都婆小町・大會・大瓶狸々・大佛供養・第六天・當麻・高砂・忠信・忠度・龍田・谷行・田村・玉葛・玉井・竹生嶋・土蜘蛛・土車・綱・経政・定家・天鼓・東岸居士・道成寺・東北・道明寺・唐船・東方朔・融・木賊・知章・巴・朝長・鳥追船・張良・鶴亀・難波・錦木・錦戸・鵠・寝覺・野宮・野守・白楽天・羽衣・半部・橋辨慶・芭蕉・鉢木・花筐・班女・飛雲・檜垣・雲雀山・氷室・百萬・藤・富士大鼓・藤戸・二人静・船橋・船辨慶・放下僧・放生川・佛原・巻絹・枕慈童・松風・松虫・松山鏡・三井寺・水無月祓・身延・三輪・六浦・和布刈・望月・紅葉狩・通盛・室君・盛久・八嶋・夕顔・遊行柳・弓八幡・熊野・楊貴妃・夜討曾我・山姥・養老・吉野静・吉野天人・頼政・弱法師・雷電・龍席・輪藏・籠大鼓

(古典芸能研究センター蔵)

24. 能絵合かるた

紙札(彩色)100枚 江戸中期頃写力 紙札

能50曲の能楽カルタ。1曲あたり2枚の絵札がつくため、50組100枚となる。銀切箔を散らした丁字色の料紙に、1枚はシテ、対になるもう1枚にはワキの姿を描き(ツレ・子方の札もわずかに含む)、対になる2枚の札ともに同じ曲名を漢字で墨書する。札の大きさはやや不揃いで、大きさが最大の札で縦8.3cm×横5.4cm、最小の札で縦7.9cm×横5.0cmと、約4mm程度の差が見られる。ただし、札の裏側に貼付された緑色の薄紙が数枚のみ柑子色になっている他は、札の体裁はすべて同じであり、画風も統一されている。遊び方は、並べ広げた絵札の中から、同じ曲を描いた絵札どうしを探し出して、合わせ取るという方法だったと推測される。



24 能絵合かるた
「高砂」(左: シテ・ツレ、右: ワキ)

所収曲：葵上・敦盛・海士・井筒・梅枝・鶺鴒・江口・箆・老松・小塩・杜若・葛城・兼平・賀茂・邯鄲・熊坂・鞍馬天狗・黒塚・源氏供養・小鍛冶・自然居士・猩々・是界・関寺小町・高砂・忠度・龍田・田村・竹生嶋・長郎・綱・定家・道成寺・道明寺・融・野々宮・白楽天・羽衣・百萬・富士太鼓・藤戸・仏原・松風・三井寺・三輪・山姥・遊屋・弓八幡・楊貴妃・頼政

(古典芸能研究センター蔵)

双六について

双六には長い歴史があり、「盤双六」と「絵双六」という二つの系統に分かれている。

奈良時代から楽しまれていた「盤双六」は、現在のバックギャモンに近い盤上のゲーム。白と黒の駒を多数動かして陣地を取る遊びで、盤双六は貴族の遊びとして5～6世紀ごろから流行し、江戸時代の初期には幅広い階層の人々の間に娯楽として定着していたようだが、江戸時代中期には流行が衰えた。

もう一つの「絵双六」は、現在でも一般的なタイプで私たちにもなじみ深い。「振り出し」からサイコロを振ってその目の数だけ進み、「上がり」に早く上がることを競うゲームである。「絵双六」は、江戸時代後半から庶民の娯楽として普及した。はじめはサイコロの目に沿って順番にコマを進める「廻り双六」形式だけだったが、やがて「一回休み」などのマスが作られたり、サイコロの目に応じて離れたマスに移動する「飛び双六」が生まれたり、娯楽として発展した。

双六は子どもの遊びという印象が強いが、子どもには難しい内容を含むものもあり、年長者と子どもが一緒に遊んだものと考えられている。また、色鮮やかな絵双六の多くは、当時の人気絵師らによって描かれ、その美しさから、遊ぶだけでなく観賞する対象ともなっていた。

25. 新板大芝居鳥羽画姿飛廻双六（しんぱんおおしばいとばえすがたとびまわりすごろく）

一枚摺り 清谷画 江戸後期 京 平井刊

鳥羽絵風の絵で、歌舞伎の場面が17図描かれた双六。降り始めは『本朝廿四孝』、上がりは『一谷嫩軍記』となっている。絵師の清谷（せいこく）は、江戸後期の京都で役者絵を描いた浮世絵師。版元は「京一條智恵／光院西入／平井板」とある。

鳥羽絵は、江戸時代に流行した滑稽な戯画で、手足がひょろ長く、目は黒丸に簡略化され、口が大きく描かれるのが特徴。マスの順番は、以下の通りとなっている。

①「ふりはじめ」（『本朝廿四孝』）→②「夕霧伊左衛門」→③「出入り湊」→④「亀山嘶し」（「中野藤兵衛」）→⑤「染模様」→⑥「襦袢の錦」→⑦「忠臣蔵」→⑧「秋葉山」→⑨「梅川忠兵衛」→⑩「双蝶々庫咄」→⑪「八陣舟之段」→⑫「菅原伝授」→⑬「隅田川」→⑭「新薄雪」→⑮「恋女房染分手綱」→⑯「芋（ちご）源氏」→⑰「一ノ谷嫩軍記」

※①～⑰に該当するとみられる歌舞伎の外題を、以下にあげる。

①本朝廿四孝（ほんちようにじゅうしこう） ②廓文章（くるわぶんしょう） ③容競出入湊（すがたくらべでいりのみなと） ④道中亀山嘶（どうちゅうかめやまばなし） ⑤染模様妹背門松（そめもよういもせのかどまつ） ⑥敵討襦袢錦（かたきうちつづれのにしき） ⑦仮名手本忠臣蔵（かなでほんちゅうしんぐら） ⑧秋葉権現廻船語（あきばごんげん かいせんばなし） ⑨恋飛脚大和往来（こいびきやくやまとおうらい） ⑩双蝶々曲輪日記（ふたつちようちようくるわにっき） ⑪八陣守護城（はちじんしゅごのほんじょう） ⑫菅原伝授手習鑑（すがわらでんじゅてならいかみ） ⑬隅田川続傳（すみだがわごにちのおもかげ） ⑭新薄雪物語（しんうすゆきものがたり） ⑮恋女房染分手綱（こいにようぼうそめわけたづな） ⑯児源氏道中軍記（ちこげんじだうちうぐんき） ⑰一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）



25 「新板大芝居鳥羽画姿飛廻双六」

（古典芸能研究センター蔵）

26. 天幕替宇多端歌都都逸 (しんぱんてんまくかえうたはうたどどいつ)

刊 大判錦絵 一英斎芳艶・一恵斎芳幾画 糸屋庄兵衛刊



26 「天幕替宇多端歌都都逸」

江戸後期に流行った短い歌を、長唄や浄瑠璃と区別して端唄（端歌）と呼ぶようになる。端唄も人気があり、歌舞伎役者とともに、しばしば双六の題材にもなった。この双六は役者の似顔絵と役名・役者紋が記されるだけだが、芝居好きならば、それが誰の絵かはすぐにわかったことだろう。ちなみに右上の「飴売り」は十三代目市村羽佐衛門で、役者紋は渦巻。「猫の怪」は三代目尾上菊五郎か。

振り出しは下方中央の翁（式三番）で、この部分のみ一長斎（歌川）芳久画。芳久は、絵師名を記す一英斎（歌川）芳艶・一恵斎（落合）芳幾とともに歌川国芳門下で、他にも名前を並べた作品が見られる。

神戸女子大学・神戸女子短期大学図書館蔵（森修文庫）

27. 八犬伝狗之草紙 (はっけんでんいぬのそうし)

刊 大判錦絵 二代目梅蝶楼国貞（二代目歌川国貞）画
嘉永5年(1852) 蔦屋吉蔵刊

歌舞伎役者扮する「八犬伝」の登場人物55名が描かれた飛び双六。ふりだしは房総方面へ竜が飛び去るのを見て安房を目指す里見義実、上がりは犬飼現八と犬塚信乃が戦う芳流閣の場面。当時の有名絵師二代目国貞の描く役者たちが一枚にまとまっていて手軽に一覧できることから、双六としてよりも複数の役者を一覧できる絵として楽しまれたのではないと思われる。

曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』は文化11年(1814)から天保12年(1841)年まで28年間かけて執筆された大作だが、その長さゆえ、当時から、絵入り総平かなの草双紙、歌舞伎(天保5年[1834]初演)、浮世絵などを通して楽しめることのほうが多い作品だった。



27 「八犬伝狗之草紙」

神戸女子大学・神戸女子短期大学図書館蔵（森修文庫）

28. 花舞台当双六 (はなぶたいあたりすごろく)

大判錦絵 一鶯斎国周(豊原国周)画 辻岡屋文助刊

幕末から明治にかけての、人気の歌舞伎役者が勢揃いした飛び双六。人気役者が当たり役の姿でずらりと並ぶ。マス目もないので、一見すると双六というよりも芝居絵のようである。

振り出しは右下、河原崎国太郎扮する「三社祭」の善玉。漁師兄弟の兄役で、弟役の悪玉と二人揃



28 「花舞台当双六」

って踊り、技量を競い合うので人気の演目。上がりは中央上方、中村芝翫演じる「ひらかな盛衰記」の主役・樋口となっている。

絵師の国周（天保6年～明治33年／1835～1900）は、幕末から明治期を代表する浮世絵師の一人。同世代の月岡芳年（1839～92）、小林清親（1847～1915）とともに「明治浮世絵の三傑」と称されている。歌川国貞（三代目豊国）門下で、役者絵に長じており、「写楽以来の第一人者」と評された大首絵のシリーズで知られている。国周の役者絵については、後掲の見立役者絵（展示43・44）も参照。

神戸女子大学・神戸女子短期大学図書館蔵（森修文庫）

29. 〔仮名手本新狂言 なぞづくし〕

刊 半紙本 1冊

「仮名手本忠臣蔵」の初段から十段までにちなんだ謎かけ。一段に付き半丁。画面上方に謎の問い、下方に謎解きの答えが記され、原作中の絵と謎にちなんだ絵がそれぞれ分けて描かれる（どちらが上方になるかは絵によって異なる）。原作を知らなければ謎は解けないから、作品の知名度の高さもおのずと知れよう。

「仮名手本忠臣蔵」は二世竹田出雲・三好松洛・並木千柳作。寛延元年（1748）年8月に大坂・竹本座初演。同年12月には大坂で、翌年には江戸三座で歌舞伎としても上演され、以来大入りを呼ぶ人気狂言の一つに数えられている。



29 〔仮名手本新狂言 なぞづくし〕 三段目／四段目
志水文庫

めつけえ 目付絵

「目付絵」とは、玩具絵におけるあてもの絵の一種で、数多くの絵を一枚にしたもの。一人が多くの絵の中から一つの絵を記憶し、その絵をもう一人が言い当てる遊びのことも指す。江戸時代から明治までの娯楽の一つであった。

テーマは様々だが子供の喜ぶものが多く、役者目付絵など特定の者を集合させる意図を持ったものも多く存在する。絵の横にその何の絵かの画題名と、どの絵が当てやすいように順番に番号が書いてある形が基本形である。

ふくじん めつけえ 30. 福神役者目附絵

小本 1冊 歌川國丸画 森屋治兵衛刊

絵題簽（若衆と娘の絵）に「國丸画／森治板」とある。本書は福神と役者の絵から成る目付絵。

目付絵遊びは、一人が冒頭に掲げる絵の一覧（＝「目安」。本書の場合は25のマスに入った25の絵）から一つを選んで目をつけておき、それを相手のもう一人が質問用の絵（複数枚）を見せて位置を尋ねながら当てるといったもの。

書名は、絵の一覧に「福神」たる七福神や松竹梅、鶴亀などのおめでたいものと、團十郎以下半四郎、田之助、幸四郎などの役者の絵が含まれることによる。初丁裏以下は見開きで質問用の絵が並び、巻末（裏表紙見返し）には「目付盃見



30 『福神役者目附繪組』

やうの伝」としてルールの説明が記されている。

絵師の国丸は初代豊国の門人で、国貞を別格として国直・国安とともに豊国門人三羽烏と称された。役者絵、美人画などの錦絵も描いているが、主な活躍の舞台は絵草紙（合巻ものなど）の挿絵であったらしい。文政12年（1829）歿、享年37歳。

志水文庫

えあわせ 31. 新板役者善惡目附画合

刊 半紙本 1冊 寺沢（画）

冒頭見開きは上段に「目附合やう」として目付絵の遊び方を記し、下段に「夢合」の絵と説明を載せる。2丁裏から目付絵となり、巻頭題に「吉凶夢合 四所のさん木あわせ」とする。上段6マス＋下段6マスの「神道・佛法・雑穀・財宝・草木・人倫・読物・遊興・絹布・山水・器財・気形」の

中から好きなものを選び、3丁裏以降の見開き図の中で自分の選んだものが上下のどちらにあるかを答える。通常の目付絵では、はじめの絵と質問用ページ（どちらに含まれるか）に記される数字が、本書では算木で表される。各語の絵はそれぞれはすべて異なっていて（厳密には絵合わせではない）、歌舞伎の一場面であることが大きな特徴である。

志水文庫



31 新板役者善悪目附合

32. 〔役者目付絵〕

半紙本 1冊 大坂 いとや市兵衛刊



32 〔役者目付絵〕

役者の名前・位付・評文を添えた絵のみから構成された目付絵（いわゆる役者目付絵）。冒頭に舞台の図を描き役者が並んで口上を行うていで、目付絵の見方が解説されている。役者は嵐三右衛門と中村富十郎。

半丁を4列×3行の計12マスにわけ、1マスに役者一人を入れる。遊ぶ時には初めの見開き（1丁ウ・2丁オ）中から自分が好きなものを選ぶが、ここには役者の名・位付・評文のみで絵はない。次の見開き（2丁ウ～）からの質問用の絵は、役者の名・位付・役者の姿絵になっている。

志水文庫

（Ⅲ）歌舞伎に係わる絵画資料から

「役者評判記」について

「役者評判記」とは、歌舞伎役者に対する芸評の書のこと。広義には歌舞伎若衆の容色を品評する「野郎評判記」をも含めることもあるが、普通はこれと区別して、立役・敵役・若女方などすべての役柄の役者の技芸を批評する書物をいう。「野郎評判記」は明暦2年（1656）に始まると伝えられるが、「役者評判記」は貞享4年（1687）頃に始まる。

元禄12年（1699）八文字屋刊『役者口三味線』に始まる数年間の評判記によって定型が確立し、以後それが永く踏襲されることになる。

その定型とは、

- ①黒表紙小型横本で京・江戸・大坂の役者評を各一卷とする三都三巻3冊の編成、
- ②冒頭に浮世草子風目録と役者目録、次に開口（序）の浮世草子風の短編小説を置き、
- ③本文では立役・敵役・若女方などの役柄別に、技芸の巧拙や人気の高下による序列に従って配列された役者の芸評を述べ、
- ④その間に各座の狂言の諸場面を一図に描きこんだ挿絵を挟む、

というもの。

位付は上上吉・上上・上・中ノ上上・中ノ上・中とし、評判は合評形式で賞賛・非難とりまぜ、公平を期している。時代が下るにつれ、位付は上上■・■のごとく文字の一部または全部を白抜きにして、その位にはわずかに不足があることを示すなど細分化され、また最高位に極上上吉を設け、その上に三ヶ津惣芸頭・無類の称を設けるようになった。

33. 姿記評林



33『姿記評林』

刊 半紙本 1冊（上巻のみ）
元禄13年(1700) （京）正本屋九兵衛

華蕊軒蘭水（勇巴堂嵐吹）著。中国の史書「史記」の注釈書である『史記評林』になぞらえ、和漢の文を交えて記す。『史記評林』は、明時代に伝来し、江戸期には刊行されて盛んに読まれていた。

内容は、上方の歌舞伎役者を対象とする役者評判記。（ちなみに、狭義では本書は、歌舞伎若衆の容色を品評する「野郎評判記」に分類される。「野郎評判記」は、立役・敵役・若女方などすべての役柄の役者の技芸を批評する「役者評判記」成立の基盤となった。）役者の名前を読み込んだ漢詩で役者の評をするという凝った体裁をとっている。本書はまた、近松が自身の名を詠み込んだ句「花に酔りその近松の門の海老」を載せていることでも知られている。

志水文庫

34. 〔三都劇場役者草の種〕

刊 半紙本 1冊 〔文化元年（1804） 八文字屋刊〕

掲出本は冒頭3丁（序）と巻末の1丁及び刊記を欠くため、書名を外題（書き題簽）により「三都劇場役者草の種」としているが、内容は文化元年刊の八文舎自笑著・多賀（流光斎）如圭画『三都劇場草之種（さんがのつしばいくさのたね）』。同書は「三都劇場」と「役者百人一衆化粧鏡」の2編から成る。

本書は役者の似顔絵を百人一首の小倉色紙になぞらえて書いた役者絵本で、「孔雀三郎」「在原業平」など芝居の登場人物名を配す。

作者は『役者評判記』を刊行し続けていた書肆八文字屋であり、絵師の流光斎如圭は上方浮世絵の祖として名高い。



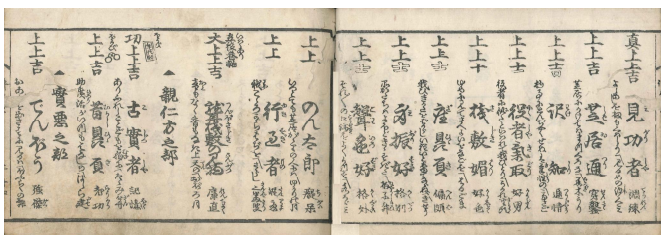
34〔三都劇場役者草の種〕より「買合之図」

志水文庫

35. 客者評判記

刊 横本 3巻1冊
式亭三馬（作） 歌川国貞（画） 文化7年（自跋）

芝居通の戯作者式亭三馬が、毎年刊行される「役者評判記」の体裁・構成にならって、役者ならぬ「観客」の評判を述べた滑稽本。芝居見物左衛門という人物が頭取（司会）となって評される。



35『客者評判記』

版元八文字屋の「役者評判記」の体裁・構成（※別掲参照）をそっくり真似て、横本仕立にし、巻頭には四代目八文字屋自笑の序文まで置いている。初版は文化8年（1811）で、文政6年（1823）と明治期に再版された。掲出本は3冊を1冊に合綴したかたちで、外題横に「文化7年」と記す。

志水文庫

役者似顔絵給金付と見立評判記

役者の評判を記す「役者評判記」は、八文字屋による定期刊行物以外にも各種あるが、大半が冊子形式だった。八文字屋の役者評判記は天保の改革によって刊行が一時中断、弘化4年（1847）に再開されるも慶応2年（1866）には終焉を迎える。その衰退と入れ替わるように江戸で登場したのが、一枚摺形式の役者評判記などの手軽な一枚物だった。

しかし、江戸版の一枚摺役者評判記登場前から、冊子形態をとらない出版物にも役者の評判を記すものがあった。その一つが「役者似顔絵給金付」である。役者似顔絵給金付は、天保改革の中断期を除き、寛政年間から明治初期までほぼ毎年、顔見世の時期に刊行された、半紙3枚一組形式の刊行物である。1枚を十二等分して一枠に1人、3枚で計36人の役者を載せる。内容は、江戸三座に出演予定の役者36名を選出し、各人の似顔、制作者が独自に付けた上上吉方式の位付、給金、屋号や俳名などの個人情報、特定の興業に関わらない役者個人の芸評で構成される。刊期に「顔見世」と記されるように、歌舞伎興行の年度替わりたる顔見世から翌年の正月にかけて、特定の版元から刊行されていた江戸の定期刊行物であった。

こうした「役者似顔絵給金付」にはさまざまな見立がなされて、読者を楽しませた。ここにあげた3点も、それぞれの趣向をご覧ください。

36. 諸国産物見立評判記

一枚摺 1枚
安政4年（1857）刊



本資料は、役者似顔絵給金付の三枚を繋いで一枚にした形。中村福助他計36人の役者を、それぞれ諸国の名産物に見立てている。

志水文庫



36「諸国産物見立評判記」

37. 三芝居役者百人一首見立評判記



37「三芝居役者百人一首見立評判記」冒頭

一枚摺 1枚 弘化3年(1846) 江戸 三栄堂刊

本資料は、役者似顔給金付の三枚を繋いで一枚にした形。内題「午のとし改正三芝居役者百人一首見立評判記」。役者をそれぞれ百人人一首に見立てている。

絵は、展示36・38のような歌川派の絵師による似顔ではないが、これは、天保改革の影響下にあった時期の刊行だからではないかと推測される。(役者の似顔絵が禁じられていた。)

志水文庫

38. 嘉永六丑の顔見世橋尽し見立評判記

一枚摺 1枚

左文堂先生著 嘉永6年(1853) 江戸 當世堂刊

本資料は、役者似顔給金付の三枚を繋いで一枚にした形。筆彩入り。役者をそれぞれ橋に見立てている。絵は、展示36「諸国産物見立評判記」と同様に、歌川派の絵師による役者似顔である。

志水文庫



38「嘉永六丑の顔見世橋尽し見立評判記」冒頭

しにえ 死 絵

江戸時代、歌舞伎の人気役者などが亡くなると、その似顔絵に、没時の年月日、法名(戒名)、墓所、さらには辞世の句を添えた「死絵」と呼ばれる浮世絵版画が数多く発行された。死絵が流行したのは江戸時代後期で、死去直後から先を争うように刊行された。その売れ行きは常の役者絵の数倍にのぼり、死後二、三日で江戸中に訃報が広まったという。その意味で、江戸の人々にとっては、死絵も重要な情報メディアであった。

みたて 「見立絵」とは

すでによく知られた古典的な題材を当世風になぞらえて表した機知的な絵画。とくに浮世絵に多い。物語や故事、伝承によってなじみの深い人物に、時代を無視して当世風の服装や風俗をさせ、その意外な変貌ぶりを楽しもうとするもので、画家と鑑賞者との間にほぼ等量等質の教養が用意されていることを前提条件とする。濃密な市民文化の成熟をみた江戸時代中期以降の、江戸の浮世絵に多くの作例が見られるのは偶然ではない、とされる。

見立て涅槃図

釈迦の入滅した2月15日は仏教寺院において大切な日であり、涅槃会には釈迦入滅の場を描いた「涅槃図」を本尊として仏事が行われてきた。釈迦の一代記ともいえる読み物『釈迦の本地』では、釈迦入滅が最後の山場として語られ、挿絵に涅槃図が描かれる。

涅槃図は涅槃に入る釈迦を、弟子や動物が取り囲んで嘆き悲しむさまを描いた絵で、中世以来の伝統的仏画様式であった。近世には広く知られていたもので、そこから変容した「見立涅槃図」が生まれてくることになる。例えば法然や日蓮など高僧の涅槃図のほか、役者の死絵にも涅槃図を模したものが現れる。役者涅槃図は、よく知られた涅槃図とともに、役者たちがそれだけ身近であったことの証ともいえよう。

りくはんざうめいどのたびだち
39. 璃寛像黄泉発足

一枚摺 一枚
初代嵐璃寛（二代目嵐吉三郎・初代嵐橘三郎）の死絵。涅槃図に見立てられている。中央に源頼政の扮装（生前最後の舞台の衣裳か）で横たわる嵐璃寛、周囲を璃寛の弟子、鼯、璃寛が好んだもの（水からくり・菊細工・祇園すもうなど）が取り囲んで悲しんでいる。のみならず、「坂東三津五郎の幽霊」まで登場している。釈迦の涅槃図では、虚空に仏母摩耶夫人が描かれるが、本図では天満天神や祇園の神や伝教大師になっている。

長秀（画） 文政4年（1821）刊



39「璃寛像黄泉発足」

璃寛は初代嵐橘三郎（二代目吉三郎）の俳名。初代嵐吉三郎の三男で上方を代表する立役として活躍し、文政4年（1821）橘三郎と改名、その後間もない同年9月27日に54歳で没した。「第一美男で其上美声にて上品で、まづ近世の稀人なり」と評され、当時江戸と上方で活躍していた三代目中村歌右衛門（芝翫）と人気を競った。

「文政四年辛巳九月廿八日／頭覺相順璃寛信士／嵐橘三郎行年五十三才」

「辞せりくはん／なんのその／いつまで／いても／はなははな」

「追福洛東春の屋／おしまれて／ちるはたつとし／山さくら」

「洛東じやまく才作／長秀画」（※「洛東じやまく才」は長秀の戯名か）

「長秀」は有楽斎長秀。生没年未詳。京都の浮世絵師で、寛政年間後期から活躍し始めたと考えられる。活躍期間は長く、合羽摺の役者絵、小版墨摺の役者絵、練り物図、錦絵など多種多様な作品が残る。

志水文庫

40. 〔八代目市川團十郎死絵 涅槃図〕

大判錦絵 一枚 嘉永7年（1854）刊



40「八代目市川團十郎死絵 涅槃図」

い。

嘉永7年（1854）8月6日に、大坂で自刃した八代目市川團十郎の死絵。展示39・41と同じく、涅槃図に見立てられている。

辞世の句「はる／＼の海山へだてツの国のなにはの土となるそかなしき」

当時絶大な人気を誇った八代目市川團十郎の死絵は、本資料も含め120～130種類が描かれたと言われる。それはその美貌と実力が惜しまれたゆえだが、それ以上に、彼が人気絶頂の中、32歳の若さで謎の自殺をとげたことが人々の興味を引いたらし

志水文庫

41. 〔三世中村芝翫死絵 涅槃図〕

大大版錦絵 一枚摺 一枚

弘化4年（1847）11月2日に38歳で没した三世中村芝翫の、涅槃図を模した死絵。横たわる芝翫の周囲を多くの人々と動物が囲む。絵師は未詳。上部に口上あり。

三世中村芝翫は、文化7年（1810）生まれ。二世中村東蔵の子。三世中村歌右衛門の養子となり、天保7年（1836）1月、三世芝翫を襲名。和実（和事・実事）を得意とした立役で、所作にも優れていた。江戸出身で、京坂で活躍した。初名は中村西蔵。前名は中村才蔵、中村鶴助（二世）。俳名は眼玉。屋号は加賀屋。

志水文庫



41「三世中村芝翫死絵 涅槃図」

42. 東海道五十三次 品川 沢村田之助／滝夜叉



42「東海道五十三次 品川」

滝夜叉を演じる三世沢村田之助の見立絵。

三世田之助（1845～1878）は五世宗十郎の次男。安政6年（1859）三世を襲名。麒麟児との名声が高く、わずか16歳で守田座の立女方になり、人気を集めた。優れた才能をもちながら、不幸にも脱疽^{だっそう}を患って両手両足を切断、しかもなお舞台に立って好評を受けた。伝法肌^{でんぽう}の女性や悪婆^{あくば}を得意とし、「切られお富」「笠森 おせん」「鱗 お由^{うわばみ}」などを当り役とし、34歳で早世。

絵師の国周^{くにちか}は 歌川国貞（三代目豊国）門下で、役者絵に長じていた人物。展示28「花舞台当双六」参照。

小判錦絵 豊原国周画

志水文庫

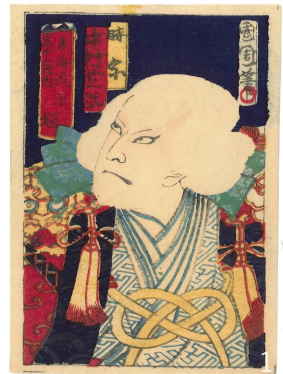
43. 東海道五十三次 平塚 時宗 ／中村芝翫

時宗を演じる四世中村芝翫の見立絵。

四世中村芝翫（1830～1899）は大坂生まれ、屋号は成駒屋。四世歌右衛門の養子となって江戸に下り、万延元年（1860）7月、四世芝翫を襲名した。以後、守田座の座頭となり、九世市川団十郎、五世尾上菊五郎の先輩俳優として活躍したが、古風で大まかな芸風だったため歌舞伎近代化の波にのれず、晩年は二流劇場に出演することが多かったという。時代物を得意として、立役、実悪、女方を兼ね、所作事にも優れていた。

絵師の国周^{くにちか}は 歌川国貞（三代目豊国）門下で、役者絵に長じていた人物。展示28「花舞台当双六」参照。

小判錦絵 豊原国周画



43「東海道五十三次 平塚」

志水文庫

44. 能楽蒔絵膳



能「道成寺」

（左）シテ：白拍子 （右）ワキ：道成寺の住僧



能「安宅」

（左）ワキ：富樫 （右）シテ：武蔵坊弁慶

〔主な参考文献〕

- ・国文学研究資料館編『図説「見立」と「やつし」—日本文化の表現技法—』（八木書店、2008年）
- ・「近世的表現様式と知の越境—文学・芸能・絵画による総合研究—」プロジェクト（代表 山下則子）報告書『図説江戸の「表現」—浮世絵・文学・芸能—』（八木書店、2014年）

（Ⅰ）謡からの展開

- ・表 章『鴻山文庫本の研究 —謡本の部—』（わんや書店、1965年）
- ・法政大学能楽研究所編『鴻山文庫蔵能楽資料解題』上・中・下（法政大学能楽研究所、1990・1998・2014年）
- ・早稲田大学演劇博物館編『早稲田大学演劇博物館所蔵特別資料目録5 貴重書 能・狂言篇』（早稲田大学演劇博物館、1997年）
- ・西野春雄・羽田昶編『新版 能・狂言事典』（平凡社、2011年）
- ・小林責ほか編『能楽大事典』（筑摩書房、2012年）
- ・田中允『番外謡曲』（2冊）『未刊謡曲集』（正・続で53冊）（古典文庫、1952年～1998年）

（Ⅱ）カルタ・双六・なぞなぞ等の遊戯

- ・加藤康子ほか『幕末・明治の絵双六』（国書刊行会、2002年）
- ・並木誠士『江戸の遊戯 —貝合せ・かるた・すごろく—』（大江戸カルチャーブックス）（青幻舎、2007年）

（Ⅲ）歌舞伎に係わる絵画資料

- ・服部幸雄ほか『歌舞伎事典 新訂増補』（平凡社、2000年）
- ・戸部銀作『歌舞伎教室 6』興行・文化編（ライフワーク研究所、2005年）
- ・園田学園女子大学近松研究所開設20周年記念展示図録『役者評判記の世界』（園田学園女子大学近松研究所、2009年）
- ・京都文化博物館開館3周年記念特別展図録『京の歌舞伎展』（京都府京都文化博物館、1991年）
- ・倉橋正恵「役者似顔給金付考」（『藝能史研究』152号）

解説：長田あかね（「能楽かるたについて」23・24・25）、大山範子

「芸能と遊び ～暮らしの中の楽しみ」展示図録

会場 神戸女子大学古典芸能研究センター展示室
期間 2024年2月5日（月）～3月29日（金）

編集 神戸女子大学古典芸能研究センター
（担当：非常勤研究員 大山範子）

〒650-0004 神戸市中央区中山手通2丁目23-1
神戸女子大学教育センター2階

※本図録は古典芸能研究センターホームページでPDF公開しています。

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/index.html>

